

三ノ一一、笠置寺住侶作善願文

出典 ①大日本仏教全書一一八 寺誌叢書第二 鈴木學術財団編 六一

②続群書類従、卷第八二八

解説 作善とは心をこめて善根を積むこと。仏を供養し、僧に施し、像を立て、写経をするなど。

禅海は承安四年(一一七四年)の笠置寺住僧等の陳情(資料三ノ四)に名を連ねている。禅海は笠置寺に永く止住し齡既に八十八歳、遷化の時が近づいたので作善願文を作り、法華經二万部を弥勒靈像の前で供養する場で読まれたものである。

貞慶はこの前年秋に笠置寺に入山していた。貞慶の「沙門貞慶笠置寺法華八講勸進状建久七年作成」には「之に加うるに一乗の機縁、此の山に相応しく、止住の客、多く妙法を誦う。故禅海上人の如くは諷誦十二万三千部を薰修し、自筆にて三十余部を書写す。上古、異域にも未だ其の彙(たぐい)を聞かず」と既に鬼籍に入っていた禅海のことを記す。

原文

①により、②の相違点を指摘する。

夫当寺者。天智聖皇拓(②は「祐」とする)基之地。弥勒慈尊利生之庭也。始凌(②は「凌」とする)險路於二万仞之口。非(②は「非」とする)人力之可(②は「可」とする)覃。忽刻(②は「刻」とする)尊容於二五丈之石。為(②は「為」とする)神功之所(②は「所」とする)致。謂(②は「謂」とする)之笠置。世之冠絶者也。弟子。依(②は「依」とする)宿縁之篤。列(②は「列」とする)住侶之中。積(②は「積」とする)夏臈。以為(②は「以」とする)第一。仰(②は「仰」とする)衛護。以送(②は「送」とする)居諸。以(②は「以」とする)当主之事。為(②は「為」とする)造次之营。彼帝积(②は「积」とする)為(②は「為」とする)三十三天之主。退役(②は「没」とする)之悲。猶求(②は「求」とする)免。况凡身在二八十八年之齡。遷化之期已久(②は「久」とする)。近(②は「近」とする)。故競(②は「競」とする)斜陽之欲。隱。將(②は「將」とする)啓(②は「啓」とする)多年之作善。奉(②は「奉」とする)凶(②は「凶」とする)繪(②は「繪」とする)アミタ三尊像・地藏菩薩像一鋪。奉(②は「奉」とする)書(②は「書」とする)写妙法蓮華經四十四部。一(②は「一」とする)部者資(②は「資」とする)先師幽靈之菩提。自餘者祈(②は「祈」とする)過去双親之出離。矣。奉(②は「奉」とする)造(②は「造」とする)立卒都婆若干基。其表裏奉(②は「奉」とする)書(②は「書」とする)写法華經十八部。是則為(②は「為」とする)法界衆(②は「衆」とする)。生平等利益也。奉(②は「奉」とする)轉(②は「轉」とする)誦法華經十二万部。十(②は「十」とする)万部者先年早啓白。二(②は「二」とする)万部者今度抽(②は「抽」とする)寸丹。春之仲月(②は「月」とする)は「日カ」とする)。月之吉曜。於(②は「於」とする)靈像之前。整(②は「整」とする)供養之儀。所(②は「所」とする)運者千益(②は「益」とする)之淨供。故山之霞添(②は「添」とする)味。所(②は「所」とする)举者千灯之者(②は「者」とする)②は「清」とする)輝。晴天之星讓(②は「讓」とする)明。是皆勸(②は「勸」とする)於尊卑。所(②は「所」とする)令(②は「令」とする)排備也。願(②は「願」とする)任(②は「任」とする)廻向之首(②は「首」とする)②は「旨」とする)。各遂(②は「遂」とする)解脱之望。弟子。多劫已結(②は「結」とする)一乘之縁。得(②は「得」とする)積(②は「積」とする)書(②は「書」とする)誦於二貝(②は「貝」とする)②は「見」とする)葉。当(②は「当」とする)来必列(②は「列」とする)三會之衆。可(②は「可」とする)仰(②は「仰」とする)引(②は「引」とする)撰於二龍華。精勤不(②は「不」とする)空。心念宜(②は「宜」とする)成。禅海稽首和南敬白。

建久五年五月二日

仏子某敬白

読み下し文(①、②を比較して意味の通るほうによった)

夫れ当寺は天智聖皇拓基の地にして、弥勒慈尊利生（仏が衆生を利益すること）の庭なり。始め險路を万仞の口に凌ぎ、人力の覃およぶべきに非ずして忽ち尊容を五丈の石に刻す。神功（神の功德）の致す所と為す。之を笠置と謂い、これ世に冠絶たる者なり。

弟子、宿縁（前世からのきまり）の篤きに依つて住侶の中に列す。夏臈（僧侶としての年齢）を積むを以つて第一と為し、衛護（護衛）を仰ぎ、以つて居諸（月日）を送り、当主の事を以つて造次（かりそめ）の営みと為す。

彼の帝釈は三十三天の主と為るも、退没（死ぬこと）の悲み猶免ることを求む。況んや凡身八十八年の齢に在り、遷化（死ぬこと）の期已に又近し。故に斜陽の隠れんと欲すると競いて、将に多年の作善（心をこめて善根を積むこと）を啓く

アマタ三尊像・地藏菩薩像一鋪を図絵し奉り、妙法蓮華經四十四部を書写し奉る。二部は先師幽霊（死んだ人の魂）の菩提に資し、自余は過去双親の出離（煩惱を去つて悟りの境地に入ること）を祈るものなり。

卒都婆若干基を造立し奉り、その表裏に法花經十八部を書写し奉る。是れ則ち、法界衆生平等利益の為なり。

法花經十二万部を転読（經文のうち、要所または題目のみを略読すること）し奉る。十万部は先年早く啓白（經文の一部を唱えること）し、二万部は今度寸丹（自分の真心の謙称）を抽（おさめること）す。春の仲月（五月）、月の吉曜（吉日）に靈像の前に於いて供養の儀を整う。運ぶ所は千盃の淨供にして、故山（ふるさとの山）の霞は味を添へ、举る所は千燈の清輝にして、晴天の星は明あかるを讓る。是れ皆尊卑に勧め、排備せしめる所なり。

願くは廻向の旨に任ね、各解脱の望を遂げんことを。

弟子、多劫（きわめて永い年月）にして已に一乘（悟りに達するための唯一の教え、特に法華經の教えを指す）の縁を結び、書読を貝葉（インドの多羅樹の葉、經文を写すのに用いる）に積むを得る。当来（来世）必ず三会の衆に列し、引摂を龍華に仰ぐべし。精勤空からず、心念（おもい）宜しく成らんことを。

禅海 稽首和南（共に敬礼の意）し、敬つて白く。

建久五年（一一九四年）五月二日